

大学生の趣味と友人行動

吉 光 正 絵

The Behaviors of Hobbies and Friendships among University Students

Masae YOSHIMITSU

Recently, it seems, young people have founded personal relationships around shared hobbies. This paper discusses the issues related to various areas of association among university students in Nagasaki. By means of surveys, the author investigated their behaviors concerning hobbies and friendships, chosen by three social contexts; fellow hobbyists, co-workers at part-time jobs, and student-based relationships.

First of all, respondents' behaviors were divided into two groups. One group has a high commitment to hobby, for instances, spending money, exhibiting a high connection with fellows, belonging to formal organizations, having some intimate relationships to shoppers, therefore constructing wide social relationships. The other group has a low commitment to hobby, for instances, not spending money, not exhibiting any connection with fellows, therefore not constructing any social relationships.

In addition, the author found another interesting result, analyzing of correlation coefficients among above mentioned respondents' three behaviors concerning friendships, i.e. finding strong correlation between fellow hobbyists and student-based relationships but not finding any correlation between co-workers at part-time jobs. Therefore the evidence might lead to the conclusion that those two friendships, fellow hobbyists and student-based relationships, have very similar functions to respondents, that is to say, the hobby have same importance equality with university on respondents life.

1. 緒 言

本研究では、大学生の趣味と友人行動について長崎県の大学生にたいしておこなった質問紙調査の結果から、現代若者の趣味への関与の現状分析をおこなうことを目的とする。「会社にしばられることなく、自分のやりたいことをする」という若者の就業意識の変化にともなうフリーターやNEET（ニート、Not in Education, Employment or Training）と呼ばれる若者たちの出現が、

近年の日本の経済成長率の抑制要因として問題視されている⁽¹⁾。「自分のやりたいこと」に関する研究は、余暇・レジャーというテーマや、趣味、ライフスタイル、下位文化というテーマの下で行なわれ、社会科学分野で蓄積されてきた。

労働以外の時間に行なう余暇活動や趣味行動が「自分のやりたいこと」として認識される心理的理由として、レジャーの間に人がしていることは、選択の自由度が大きく、社会的環境下で働く制約がほとんどないので、日常生活の別の時間よりも彼らのパーソナリティが正確に反映されるからであると社会心理学者のマンネルらは指摘する（マンネル2004:6-7）。

一方で歴史家のアラン・コルバンは、現代人の心性の特徴は「余暇が、欲望・期待・悔恨が織りあげるものの中心におかれる」（コルバン2000: 8）ことにあると指摘し、この傾向は、19世紀半ばの産業革命時の労働のリズムの再調整と結びついた社会的時間の再構成とともに生じた加速度的に増加する時間への正確さと喪失に関する計算方法の案出と、時間の希少資源視による時間への欲求の高揚が背景にあると指摘し、現代人の「自分のやりたいこと」への欲求が、労働時間の管理化・規格化が歴史的に進行してきたことにより構築されたとしてその過程を詳述している（コルバン2000:14-17）。コルバンによればレジャー研究は節制を高く評価する19世紀後半の西欧世界における労働者を労働時間以外も教化-拘束する方法の案出を目的としてはじまり、余暇が与える遊戯活動や快楽がデモクラシーの理想的成果物として肯定された第二次大戦以後のアメリカにおいて働くための力を再-創造するもの、教育の一手段とみるのではなく、幸福に至る道としてとらえる考え方が発達し、現代社会では自分のための時間に対する欲望に根ざした時間の使い方の革命となる、より完全な自己表現形式としての余暇が復活してきたと指摘する（コルバン2000:17-18）。個人的時間としての余暇の認識と自分のための時間の発展は、労働のための力ではなくて自分自身の力を再-創造するための時間を練り上げ、個人に特有の生活様式を発明し、欲望や冒険、アイデンティティ構築、自然や事物に対する新しい関係や新しい社会的関係を作り出すのに貢献しているとし、現代人のレジャーへの希求はすなわち労働の規格化により剥奪された「自分のための時間」をとりもどすことへの欲求のあらわれである指摘する（コルバン2000:17-18）。

現代日本における余暇や趣味の重要性について論じたものに、日本の社会学者の川崎賢一らの研究がある（川崎1995）。川崎は趣味行動（a hobby behavior）を「誰からも強制される必要のない個人的動因」によって決定づけられる行動であり、その重要な性質の一つは自発的な「熱中（enthusiasm）」の規則性にあるとする（川崎1995:123）。また、趣味行動を社会学的に考える場合に重要な視点として余暇の個人化すなわち地域社会や組織に関与する割合が減少することをあげるが、イギリスにおける調査結果の例をひき趣味行動の中にも内容によっては個人的楽しみにとどまらずに従来のコミュニティ活動や宗教活動に替わる社会的領域をもっているものもあることを指摘している（川崎1995:123）。

また、現代日本の人間関係の変化に余暇や趣味の重要性について論じたものに、社会学者の奥野卓司らの研究がある（奥野2001）。奥野は従来仕事の「余技」、「余暇にすること」として語られてきた個人の「趣味」が今日では「余技」の範囲をはるかにこえて仕事や家庭とともにそれらと並ぶもうひとつの自分の世界になっており、人々は既成の社会から与えられた役割や社会から期待される役割よりも、自分の関心や興味で選んだこちらの余技の世界での役割の方にむしろ生き甲斐を感じていると指摘している（奥野2001:26-28）。奥野は余技の世界の充実が家庭や企業といった従来の所属集団を失った個人の孤立を促進する可能性も指摘するが、集団主義的な生き方を好む日本の伝統の影響により多様性や選択性を大幅に認める弱い紐帯の中での個を構築していく方向に日本人の共同性のありようはすすんでいくのではないだろうかと指摘している（奥

野2001：58-62).

血縁以外の相手のなかから自分で主体的に選んだ人間との関係を交際圏ごとに計測した代表的な研究として、フィッシャーらの『友人と暮らす』(Fisher 1982)がある。フィッシャーらの問題関心は都市の特殊性や多様性は多様な下位文化⁽²⁾が混在することにあるというあくまで都市研究の範疇にあるが、下位文化の代表的なものとしてエスニック、宗教、職業、余暇の四種類をあげる(Fisher 1982:224)。フィッシャーらは、なかでも職業と余暇が自発的で近代的な種類の結合を典型的に示し、新しい多種類の共通関心にもとづく個人的関係を創造し、多様な私的行動と道徳が公共的なコミットメントを生み社会的紐帯の基礎を成すとする(Fisher 1982:224)。フィッシャーは趣味に関する活動のなかでも公共的な争点となりうるものは非常に関与度の高い社会運動を生み出すがもっとも普通にみられるものはサッカーや野球などの職業スポーツやロック・ミュージックなどの音楽や芸術のジャンル、釣りやガーデニングなどへの日常的な趣味が熱情になりうるものであると指摘し現代人の社会や公共性の構築における日常的な興味関心の重要性を指摘する(Fisher 1982:224-225)。フィッシャーは人々が生活するまちの規模が大きくなるにしたがって、人々の余暇下位文化への関与は増大し趣味に関連する諸機関を都市に発達させるという仮説をたてるが、調査結果においては真剣な趣味愛好者の場合に限って都市に住むことによって社会的関与が増大し、それ以外の人々の関与はさほど増大させていないということが示されている(Fisher 1982:227-229)。その理由としてフィッシャーは、さほど真剣ではない趣味愛好者でも趣味仲間の数や交友比率が少ないわけではないという結果から、都市部における趣味施設の充実と趣味自体、あるいは同じ趣味をもつ相手の選択肢の多さが関与を持つ相手や集団を分散化させ、余暇集団へのフォーマルな参加を減少させるからではないかと考え、都市度と余暇下位文化集団への関与は必ずしも比例せず人びとの関与の方法を分化させている側面が高いと結論づけている(Fisher 1982:227-229)。なお、都市度が職業的下位文化と娯楽下位文化への関与におよぼす帰結は並行関係にあることが指摘されている(Fisher 1982:227-229)。

2. 方法

本研究では大学生の趣味活動と友人行動を調べるために長崎県の南北の政治・文化・経済活動の中核をになう長崎市と佐世保市の市内あるいは近郊に位置する大学に通う189名の学生らに質問紙調査をおこなった⁽³⁾。長崎市は長崎県の県庁所在地であり県下では第一位の人口(平成16年9月1日現在で約42万人)を擁し政令で指定された中核市である。一方佐世保市は県下では第二位の人口(平成16年9月1日現在で24万人)を擁し長崎県北部の中心地としての機能をもっている。

質問紙調査の内容は以下のとおりである。

① 調査対象者の属性

「性別」について。

② 現在の趣味行動

「趣味内容」(現在熱中している趣味の種目)、「1カ月に趣味に費やす金額」、「1カ月に自由になる金額」について。「趣味内容」(現在熱中している趣味の種目)については「レジャー白書」(2004年度版)に準じて分類した。趣味活動に影響を与えられ「団体加入」と「情報源」について。金額、「情報源」についての指標作成については日経産業消費研究所の『平成OLの意識と行動』(日経産業消費研究所2003)を参考にした。

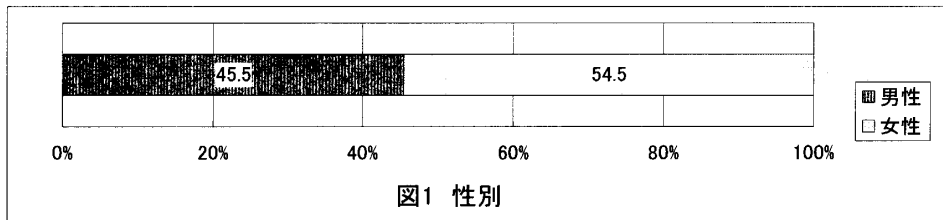
③ 友人行動

趣味（「同じ趣味をもち一緒に活動している」）、大学（「同じ大学に通っている」）、アルバイト（「同じところでアルバイトをしている」）の三種類の友人とのつきあいかたについて、項目作成については、冒頭に引いた川崎賢一と同じ調査グループが作成した指標の「友人・親友の行動パターン」（村上1995:65）を参考にした。なお本論では村上らの項目から「映画やコンサートにでかける」を直接的に特定の趣味にかかわる行動であると考えて削除した8項目を利用し回答方法を村上らの場合には行動の頻度（「よくする」「時々する」「あまりしない」「全くしない」）から人数に変更した。

3. 結果

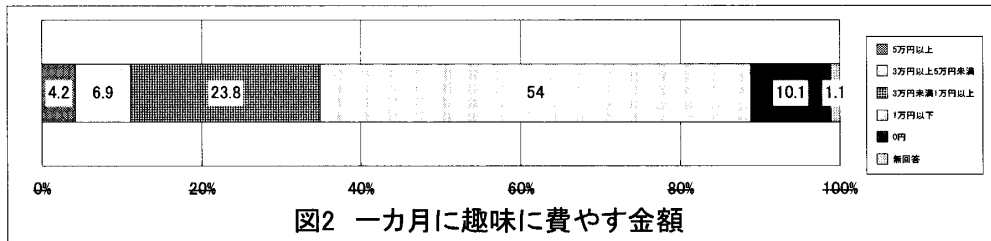
3-1 属性

対象者の性別を図1に示した。性別による差異は認められなかったため大学生としてまとめた。

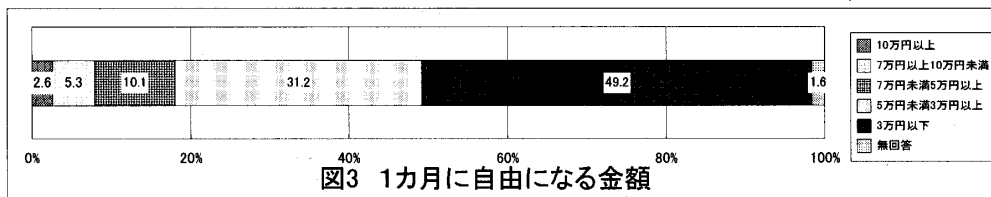


3-2 趣味行動

対象者らの趣味行動の概要を把握するために「一カ月に趣味に費やす金額」を調べその結果を図2に示した。その結果、1万円以下の占める割合が最も高く過半数を占めていた。



また、趣味に費やす金額が自由に使える金額の中でどれくらいの割合を占めているのかということを考えるために「1カ月に自由になる金額」を調べその結果を図3に示した。両グラフから、「一カ月に趣味に費やす金額」は「1カ月に自由になる金額」の三分の一程度であるといえる。



また、図4に趣味内容を示し、表1にその詳細を示した。図3によれば趣味・創作部門が最も多く次にスポーツが多いといえる。また、個別の種目としては学習・調べもの（ここでは読書を含めた）が最も多い。

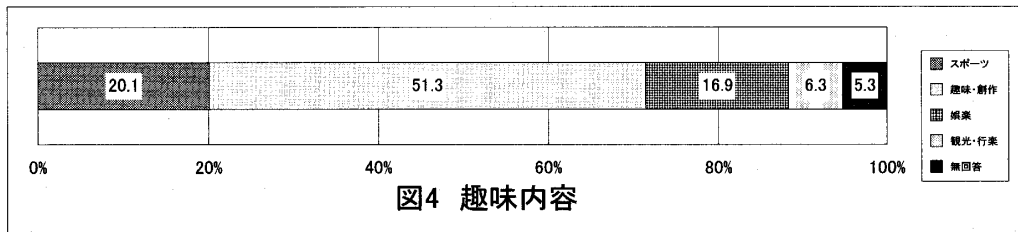


表1 趣味詳細

スポーツ	趣味・創作	娯楽	観光・行楽
38	97	32	12
トレーニング	学習・調べもの	ゲーム	ドライブ
8	25	9	7
野球	音楽鑑賞	カラオケ	散歩
6	16	8	2
弓道	映画	買い物	旅行
5	12	5	2
バドミン	洋楽器の演奏	外食	ツーリング
2	10	3	1
バレー	パソコン	飲み	
2	8	3	
サッカー	音楽会・コンサート	スロット	
2	5	2	
釣り	料理	麻雀	
2	4	1	
卓球	絵を描く, 彫刻する	将棋	
2	4	1	
スケボー	演芸鑑賞		
1	4		
ボクシング	スポーツ観戦		
1	3		
テニス	おどり		
1	1		
水泳	邦楽, 民謡		
1	1		
ラグビー	模型づくり		
1	1		
ダンス	写真の制作		
1	1		
ソフトボール	ネイルアート		
1	1		
ビリヤード	ビデオ鑑賞		
1	1		
カヤック			
1			

趣味・創作部門やスポーツ部門と比べると、娯楽や観光・行楽の占める割合が低いため、気晴らしとしての余暇行動が教化や自己鍛錬としての余暇よりも少ないといえる。

図5に趣味活動の「情報源」の利用状況をしめした。「インターネット」、「テレビ」、「友人知人」(口コミ)の利用率がいずれも5割程度と高い。

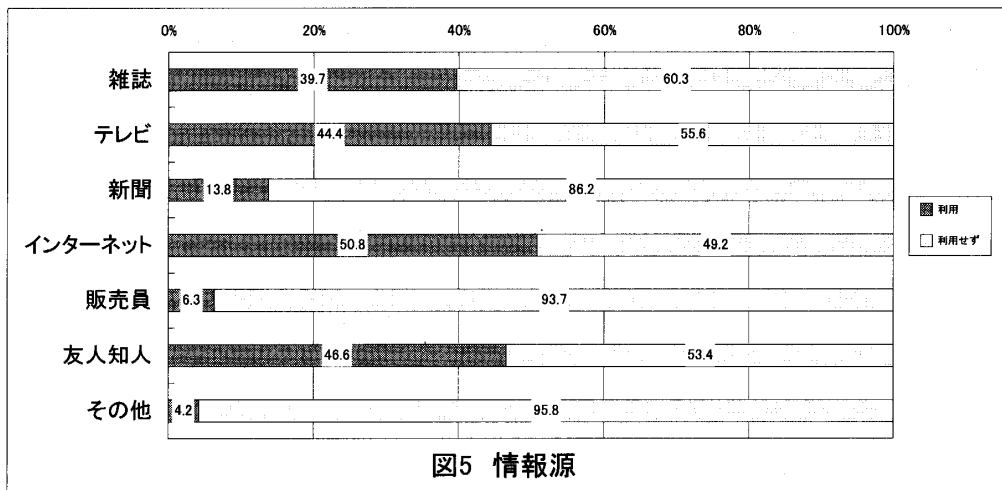


図6に趣味団体（部・サークルなど）への加入状況をしめた。いずれの団体にも所属していない者が全体の7割程度であり、個人的に活動を行なう者が多いといえる。また、加入する場合には「所属大学」の「団体」に加入する場合が極めて多いといえる。

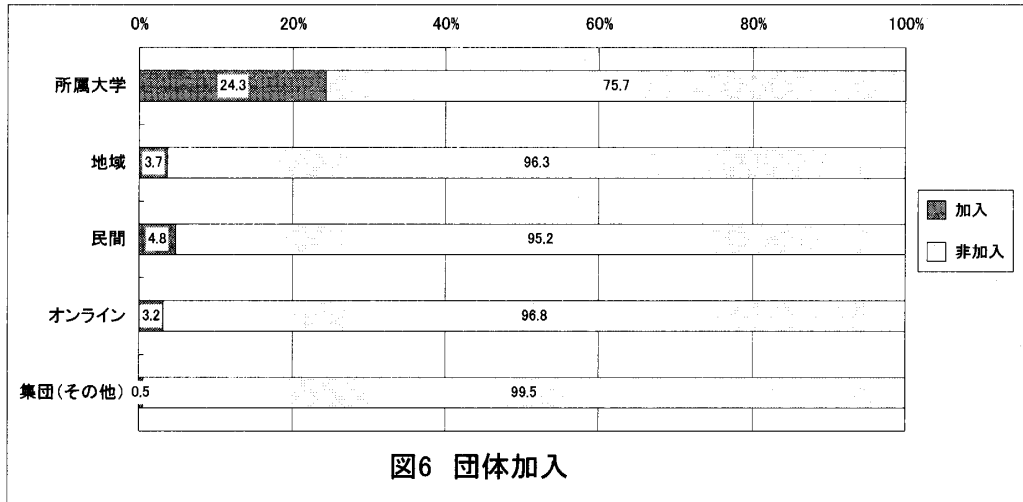


図6 団体加入

3-3 友人行動

まず、趣味を通じて出あった相手のうち項目化した友人行動に該当する者の数について調べ、結果を図7-1に示した。いずれの項目においても「2-4人」か「いない」と回答する者の割合が多数をしめ、双方をあわせると7割程度をしめる傾向があるといえる。「2-4人」が「いない」よりも高い割合を占めるのが、「二人で話をするために会う」、「恋愛関係の悩み事を話す」、「二人で買い物などに出かける」であり、逆に「いない」が「2-4人」よりも高い割合を占めるのが、「二人で一泊以上の旅行をする」、「あなたの部屋に泊める」、「金銭や貴重品の貸し借りをする」、「二人でお酒を飲む」、「あなたの部屋に入れる」の5項目である。

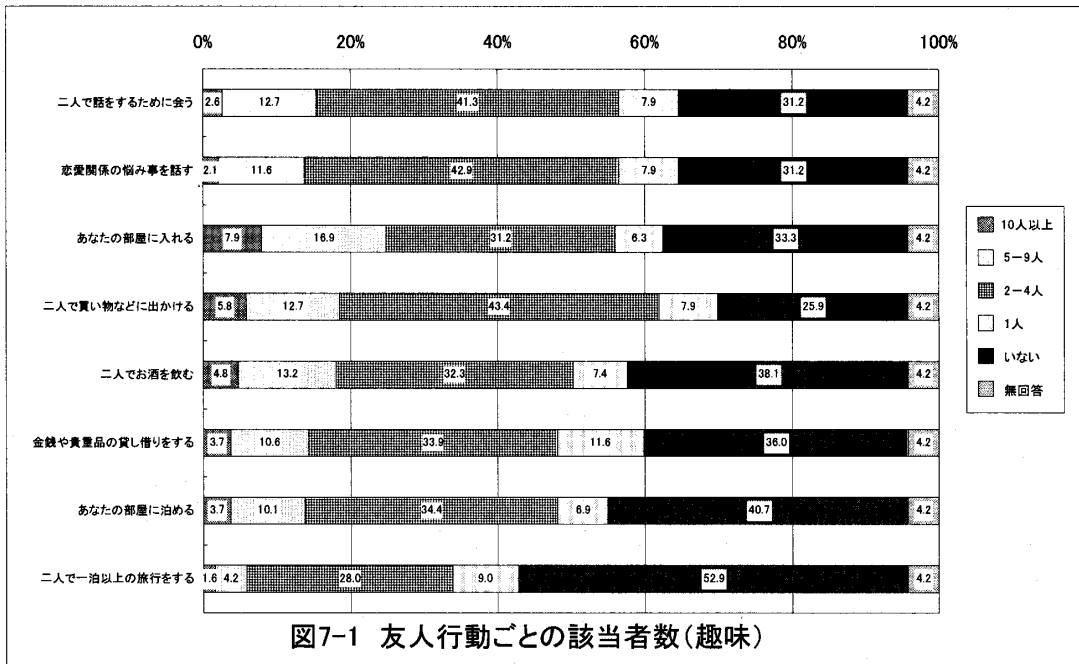
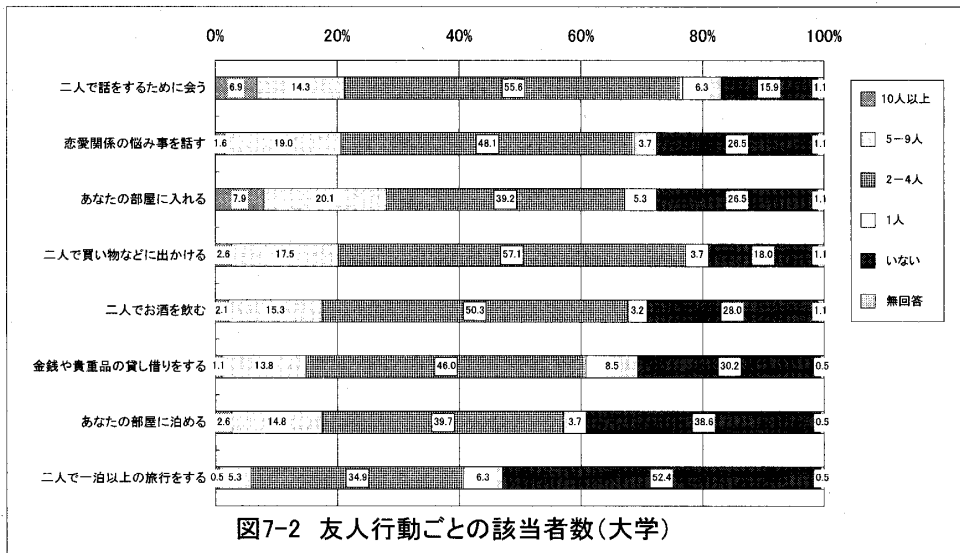
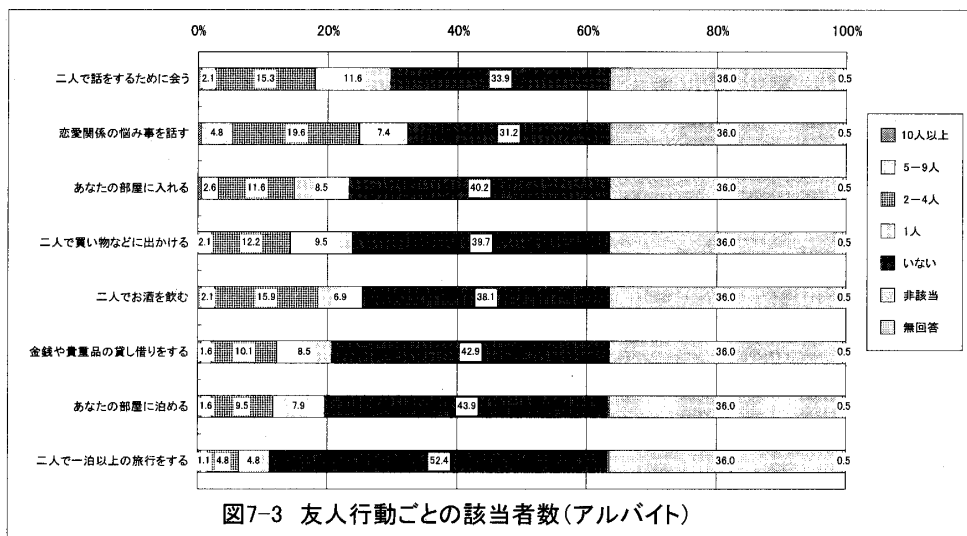


図7-1 友人行動ごとの該当者数(趣味)

自分が通う大学で出会った相手のうち項目化した友人行動に該当する者の数について調べ、結果を図7-2に示した。前項の(趣味)の場合とは異なり、「二人で一泊以上の旅行をする」以外の全ての項目において「2-4人」が最も高い割合をしめ、「いない」が次に高い割合をしめている。しかし、「二人で買い物などに出かける」、「二人で話をするために会う」では、「5-9人」が、「いない」とほぼ同じ割合を占めている。



アルバイトで出会った相手のうち項目化した友人行動に該当する者の数について調べ、アルバイトをしていない者の人数を「非該当」として集計した結果を図7-3に示した。いずれの項目においても「いない」が占める割合がもっとも高いといえる。



以上、趣味(「同じ趣味をもち一緒に活動している」)、大学(「同じ大学に通っている」)、アルバイト(「同じところでアルバイトをしている」)の三種類の友人とのつきあいかたの特徴として、まず、友人行動をする場合には、いずれの項目の行動においても該当する人数は、2-4人であるといえる。また、三種類の友人行動を比較すると、同じところでアルバイトをしている相手と

行なう場合は、同じ趣味をもち一緒に活動している相手や、同じ大学に通っている相手と行なう場合に比べて該当人数は少ないといえる。

3-4 友人行動（趣味）との関連

表2に示すように「性別」とのあいだには、「二人でお酒を飲む」($r=-0.162$), 「金銭や貴重品の貸し借りをする」($r=-0.147$)の場合にのみ弱い相関が認められた。また、「趣味内容」とのあいだには、なんら相関が認められなかった。「月額(自由)」(一カ月間に趣味に費やす金額)とのあいだには6項目で相関が認められた。また、「月額(趣味)」(一カ月間に趣味に費やす金額)とのあいだには、8項目全てにおいて相関が認められた。

表2 友人行動（趣味）と属性・趣味行動との相関

友人行動	性別	自由金額	趣味内容	月額(自由)	月額(趣味)
二人で話をするために会う	-0.12	0.175*	0.033	0.175*	0.227**
恋愛関係の悩み事を話す	-0.121	0.140*	0.098	0.140	0.211**
あなたの部屋に入れる	-0.177	0.177*	0.047	0.177*	0.338**
二人で買い物などに出かける	-0.003	0.155*	0.032	0.155*	0.253**
二人でお酒を飲む	-0.162*	0.214**	0.026	0.214**	0.262**
金銭や貴重品の貸し借りをする	-0.147*	0.250**	0.022	0.250**	0.310**
あなたの部屋に泊める	-0.116	0.171*	0.028	0.172*	0.273**
二人で一泊以上の旅行をする	-0.0218	0.083	-0.05	0.083	0.198**

Pearson の相関係数：*相関係数は5%水準で有意(両側) **相関係数は1%水準で有意(両側)

表3に示すように「情報源」の中では、「販売員」、「友人知人」の場合には強い相関が認められ、「販売員」の場合には8項目全てにおいて相関が認められた。「友人知人」の場合には、「二人で一泊以上の旅行をする」の場合には相関が認められず、「あなたの部屋に泊める」の場合には弱い相関しか認められなかったが、それ以外の6項目で強い相関が認められた。逆に、「新聞」とのあいだには全く相関がみられず、「インターネット」では、「二人で話をするために会う」とのみ、「テレビ」とのあいだでは「二人で一泊以上の旅行をする」のみに関連が認められ、「雑誌」とのあいだでは、「金銭や貴重品の貸し借りをする」と「二人で話をするために会う」の2項目にのみ相関が認められた。

表3 友人行動（趣味）と情報源との相関

友人行動	雑誌	テレビ	新聞	インターネット	販売員	友人知人	その他
二人で話をするために会う	0.174*	0.109	0.074	0.150*	0.261**	0.338**	0.175*
恋愛関係の悩み事を話す	0.102	0.127	0.044	0.048	0.199**	0.317**	0.052
あなたの部屋に入れる	0.159*	0.056	0.074	0.081	0.190**	0.192**	0.135
二人で買い物などに出かける	0.128	0.054	-0.030	0.027	0.252**	0.311**	0.182*
二人でお酒を飲む	0.107	0.086	0.071	0.021	0.210**	0.221**	0.117
金銭や貴重品の貸し借りをする	0.256**	0.074	0.053	0.119	0.180*	0.303**	0.131
あなたの部屋に泊める	0.167*	0.077	0.069	0.060	0.205**	0.188*	0.117
二人で一泊以上の旅行をする	0.136	0.189**	0.058	0.060	0.260**	0.120	0.085

Pearson の相関係数：*相関係数は5%水準で有意(両側) **相関係数は1%水準で有意(両側)

表4に示すように「団体加入」の中では、「地域」で6項目、「所属大学」で4項目の相関が認められた。

表4 友人行動（趣味）と属性・趣味行動との相関

友人行動	所属大学	他大学	地域	民間	オンライン	その他
二人で話をするために会う	0.109	0.098	0.240**	0.138	0.071	0.039
恋愛関係の悩み事を話す	0.183*	0.101	0.132	0.083	-0.024	-0.020
あなたの部屋に入れる	0.213**	0.079	0.193**	0.031	0.004	-0.076
二人で買い物などに出かける	0.147*	0.028	0.162*	0.045	-0.003	0.028
二人でお酒を飲む	0.166*	0.095	0.235**	0.086	-0.036	-0.015
金銭や貴重品の貸し借りをする	0.138	0.045	0.033	0.021	-0.079	-0.013
あなたの部屋に泊める	0.120	0.048	0.172*	0.030	0.000	-0.067
二人で一泊以上の旅行をする	0.058	0.078	0.186*	0.062	0.033	0.078

Pearson の相関係数：*相関係数は5%水準で有意（両側） **相関係数は1%水準で有意（両側）

表5に、互いの出会いの契機が「趣味」、「大学」、「アルバイト」の三種類の異なる交際圏ごとの友人行動相互の関連性を明らかにするために相関関係を求めた。交際圏が「趣味」と「大学」のあいだの場合の8項目の友人行動の全てにおいて高い相関が認められた。なかでもとりわけ高い相関が認められたのは、交際圏が「趣味」と「大学」のあいだの「二人で一泊以上の旅行をする」($r=0.550$)と「二人でお酒を飲む」($r=0.501$)で、いずれも相関係数が0.5以上であった。この結果から、大学生の友人行動において、互いの出会いの契機が「趣味」、「大学」、「アルバイト」の三種類の異なる交際圏ごとの友人行動のなかでもとりわけ「趣味」と「大学」のあいだに関連があり、「趣味」と「アルバイト」、「大学」と「アルバイト」のあいだには関連がないといえる。

表5 友人行動間項目間の関連

友人行動	趣味・大学	趣味・アルバイト	大学・アルバイト
二人で話をするために会う	0.333**	0.129	-0.113
恋愛関係の悩み事を話す	0.481**	0.056	-0.049
あなたの部屋に入れる	0.430**	0.107	-0.078
二人で買い物などに出かける	0.376**	-0.003	-0.098
二人でお酒を飲む	0.501**	0.066	0.001
金銭や貴重品の貸し借りをする	0.470**	0.093	-0.002
あなたの部屋に泊める	0.476**	0.05	-0.036
二人で一泊以上の旅行をする	0.550**	0.028	0.044

Pearson の相関係数：*相関係数は5%水準で有意（両側） **相関係数は1%水準で有意（両側）

4. 考 察

以上、本研究では大学生の趣味関与について長崎県の大学に通う学生らにたいする質問紙調査の結果をもとに分析をおこなった。その結果、まず、大学生は、自由に使える金額のほぼ三分の一程度を趣味の費用として利用しており、活動内容としては、読書やスポーツといった活動をしている者が多いということがわかった。また、活動は、趣味団体には加入せずに個人的に行なう者が多く、加入する場合には所属大学の部やサークルに加入し、活動情報は、インターネットやテレビといったメディアか、友人知人から得ていることがわかった。また、交際圏ごとの友人への関与について友人行動から調べたがその結果、趣味の交際圏における活動相手への関与は大学の交際圏よりも少し低いアルバイトの交際圏よりはかなり高いといえる。

次に、同じ趣味をもち一緒に活動している相手との友人行動に影響を与えるものは何かということを探るために関連を調べたが、その結果、趣味に費やす金額や自由に使える金額といった金銭的要因と、趣味に関する情報源の中でも、専門店の販売員や友人知人を利用する場合や、所属大学や地域の団体への所属、同じ大学に通う相手との友人行動とのあいだに強い相関が認められた。

以上から、大学生の趣味と友人行動について次の二つの傾向があることがわかった。趣味活動をする場合にはあまりお金をかけないで、趣味に関する情報はもっぱらインターネットによって集め、一人あるいは少人数で活動を行なう傾向であり、もう一方は、同じ趣味をもつ相手との積極的な友人行動に関与し、趣味関連の専門店の販売員や地域あるいは大学の趣味団体に所属するなどして、趣味活動を起因とした人間関係や社会関係を構築する傾向である。

アランは、『友情の社会学』（アラン 1993）において、友情は社会的で文化的な構築物であるが、非常に道徳的に意義ある結びつきであり、人々の間で可能な自由意志による利他的な献身の最高の表現形態であると指摘する（アラン 1993:2-3）。アランは、友人（friend）になる前段階で、一定水準の友好性（friendliness）を含む関係を仲間（mate）と定義しており、友人と仲間の違いは、両者はともにお互いを平等に扱う人たちが自由意志で加わる交際関係であるが仲間関係は文脈依存的であり、友情は文脈依存的ではないとする（アラン 1993:36-41）。友情の関係は、たとえ友人たちが現に互いに交際し合っているその場面を離れてしまうことがあっても何らかの形で続いていくとみられるが、仲間関係はそこにかかわる当事者たちの狭く限定されたある社会的文脈の中においてともに活動することによって存立するのだとみなされる（アラン 1993:36-41）。本研究でとりあげた、趣味、大学、アルバイトといった三種類の交際圏における友人行動の調査から、出会った場の文脈に限定されない行動を含む場合、アランの言葉に従えば、単なる仲間（mate）にとどまらず、仲間（mate）から友人（friend）に関係が進化した人間関係をもつものが多数いることが確認できたのではないかと考えられる。

5. 結 語

以上、本研究では大学生の趣味関与について長崎県の大学に通う学生らにたいする質問紙調査の結果をもとに分析をおこなったが、その結果から、長崎県の大学生らは大学において出会う友人と同様の友人関係を同じ趣味によって結ばれた相手とのあいだに築いているものも多数いるということがわかった。冒頭にあげたフリーターやニートと呼ばれ、問題視される若者らの大量発生は、日本社会が労働・余暇の再定義の時期にさしかかったことのあらわれとも考えられる。山崎正和は現代社会におけるグローバル化にともなう社会の変化を、国家と企業が代表する従来の

社会関係の解体の過程，弱体化の過程ととらえ，組織集団とそれが与える帰属の感覚や旧来の社会が許していた漠然とした安心，常識が保証する安全の感覚の喪失にあるとする（山崎2003:290-292）．旧来型の集団帰属がくずれる一方で，生産・消費両方においてほぼ相似型をなす古くて新しい人間関係が形成されているとする．その関係の特徴は今までの人間関係を形づくってきた組織とは対蹠的で明示的な規則も契約もなく，暗黙の慣習化された規制が支配し個人の相互評価が絆となり，忠誠心ではなく名誉心によって，義務ではなく友情によって結ばれる点にあるとする．そして，現代社会に適応的な人間として自分の興味関心を強く自覚し，社会的・構造的な文脈によって構築された価値観に依存することなく社交力を備えた人間をあげる．（山崎2003:292-305）．本研究では，趣味の共有に端を発する人間関係のみではなく大学生らが通う大学の級友や，アルバイト先の仲間との関係についても調査を行なったが，その結果，長崎県の大学生らは，それぞれの交際圏において出会う相手とのあいだに，それぞれ友情をはぐくみ，友人としての関係をなりたたせていることがわかった．本論では大学生らの自発的・選択的な興味・関心に端を発した人間関係に焦点をあてて分析をおこなってきたが，先に引いた山崎の言のように，わたしたちが暮らす社会自体の変化期における人間関係を分析するのであれば，自発的・選択的ではないいわば運命的なものとしてわたしたちに与えられる地縁・血縁といった旧来から親密な絆の土台を構築してきた関係についての調査・分析を行なう必要もある．よって，これらを射程にいられた研究も行なっていく必要も考えられる．

〔注〕

- (1) 日本経済新聞社の報告によれば，日本の15-34歳のフリーター人口は2003年には217万人と前年より8万人増加（厚生労働省のデータから）し，同世代のニート人口（15-34歳の非労働力人口のうち，通学と家事手伝いを除いた者）は，75.1万人に達し，15-34歳人口全体の2.2%を占める（国勢調査のデータから）．
- (2) フィッシャーの下位文化とは，何千人あるいはそれ以上の人びとからなる大きな集合を指しており，同じ下位文化を内面化した人々は，共通のはっきりとした特性を分かちもっており，通常は，国籍，職業，あるいは特定のライフサイクル段階を共有しているが，ことによると趣味，身体的障害，性的嗜好，イデオロギーその他の特徴を共有していることもあると定義されている．また，下位文化を内面化した人々は，同じその特性を共有する他者と結合しがちであり，より大きな社会の価値・規範とは異なる一群の価値・規範を信奉し，その独特の特性と一致する機関（クラブ，新聞，店舗など）の常連であり，共通の生活様式をもつが，下位文化とその成員は程度の問題であり，下位文化のなかにはネットワークの「境界」が明瞭な場合も曖昧な場合もあり，諸個人の個人的関係が他の集団成員に対してどのくらい排他的であり，彼らの行動がどのくらい典型的なものであり，そして彼らのアイデンティティがどのくらいその集団に関連したものであるかは，様々である．
- (3) この研究は，県立長崎シーボルト大学特別研究費Bの助成を受けて行われたものの一部である．共同研究費の報告書では長崎県の南部地域の中心都市である長崎市の市内・近郊に位置する大学に通う大学生と北部地域の中心都市である佐世保市の市内・近郊に位置する大学に通う大学生を分け，両者を比較して，趣味活動の中でも活動地域に焦点をあてて分析を行った．その結果，両者の活動地域においては長崎市と佐世保市の地理的位置の影響により差異が認められたが，趣味活動においてはいちじるしい差異はみられなかった．よって本論では両者をわけずに分析を行った．

〔引用文献〕

- アラン, G. 1993中村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社 (Allan, G. 1989, *FRIENDSHIP: DEVELOPING A SOCIOLOGICAL PERSPECTIVE*).
- コルヴァン, A. 2000渡辺響子訳『レジャーの誕生』藤原書店 (CORBIN, A. 1995 *L'AVÈNEMENT DES LOISIRS*)
- Fiscer, C. S. (1982) *TO Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*, The University of Chicago Press.
- 川崎賢一1995「青年達が熱中するもの—趣味行動の特色について—」川崎賢一・芳賀学・小川博司編『都市青年の意識と行動——若者たちの東京・神戸90's分析篇』恒星社厚生閣.
- マンネル, R, C. and クリーバー, D, A. 2004速水敏彦監訳『レジャーの社会心理学』, 世界思想社 (Mannell, R, C. and Kleiber, D, A. 1997 *A SOCIAL PSYCHOLOGY OF LEISURE*).
- 日経産業消費研究所 (編) 2003『平成 OL の意識と行動』日本経済新聞社.
- 奥野卓司2000『第三の社会』岩波書店.
- 社会経済生産性本部 (編) 2004『レジャー白書2004』.
- 山崎正和2003『社交する人間—ホモ・ソシアビリス』中央公論新社.